
『炎』を冠する吸血鬼

ぱっつあん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『炎』を冠する吸血鬼

【Nコード】

N7176N

【作者名】

ぱっつあん

【あらすじ】

神の手違いにより殺された俺はお約束通りに転生させられることになった。しかも転生先はネギま！の世界と来た……。はぁ……。あんなバグキャラ共のなかで俺は生き残れるのだろうか……。真祖の吸血鬼の力を持っているが、そこその力しか持っていない主人公は生きていけるのか！？しかし成長度はネギを凌駕する！？……。かもしれない。この話は主人公がしっかり修行して最強(?)になる物語です。現在、リメイク中です

『EPO』プロローグ（前書き）

現在文章とところどころ修正中なので、変なところがありますが、ご了承ください。

『Epo』プロローグ』

気がつけば俺はどこかも分からない真っ白な空間に立っていた。

あれ？　なんで俺ってばこんなところに居るんだ？

良く分からないから、とりあえずさっきまで何をやってたかを、思い出すことにしよう。

えっと……確か俺はさっきまで普通のつまらない人生を送ってたはずだ。

なぜ学校に行かねばならんだ、とか学生ならば有りそうな不満を抱えながら、俺は登校してたはず。

で、ノロノロ歩いてたらなんか後ろからトラックが突っ込んできて、それからの記憶がさっぱりない……あれ？　俺死んだ！？

嘘だろ……？　俺はまだやりたいことが……特にないな。ならいいか。

とりあえず開き直った俺は、ここがドコなのかを把握するために、周りを見渡した。

右、異常なし。

左、異常なし。

後、異常なし。

前、白髪のオッサンが土下座している。

だれ？　このオッサン？

何このオッサン？　もしかしてあれか、踏んでくださいって言う仕草か？

「大変もうしわけありませんでした

っ！！」

そんなコトを考えているとオッサンがいきなり叫びやがった。

一体なにがどうしたってんだよ。

理由がわからない俺はとりあえず目の前にいるオッサンに話しかけてみることにした。

「あの、何をそんなに謝ってるんだ？」

「えっと、その……あの、じ、実は……その」

何をそんなに言いづらそうにしているのかは分らんが、なにやら嫌な予感がするな。

「つか良い歳こいでもってんじゃねえよ。」

そしてようやく説明したかと思っただが、オッサンの口から出た言葉はともシヨツキングだった。

「つまりなんだ、ほんととはトラックに潰されて死ぬはずだったのは、他の奴なのに、あんたの手違いで俺が死んだと？」

「……そう言うことじゃ……」

「で、アンタは世界を監視する神様と言うわけだな」

「……そう言うことじゃ……」

……この自称神様のオッサンぶち殺していいかな。

何が手違いで死んだだ。ふざけんのもほどほどにしゃがれ。

「俺はこれからどうなるんだ？」

「とりあえずネギま！の世界に転生してもらおうかの」

「………は？」

今なんつった？ ネギま！の世界に転生？

ふざけんなよ。あんなバグキャラ満載のトンでも世界に転生だと？ そんなとこに転生したってすぐに死ぬだけじゃねえか。

「その点は大丈夫じゃ。主にはわしから力を与えるからの」

とりあえず俺の心を読んだことは置いて、これで死ぬことはなくなる……………のか？

「で、どんな能力を俺につけてくれるんだ？」

「うむ、主には真祖の吸血鬼の力を与えよう」

「…ことはエヴァンジェリンと同じで不老不死になる…つうことか。」

まあ、これなら死ぬ心配はなくなったな。

「で、あとはどんな力をくれるんだ」

「えっ？」

えっ？ じゃねえよクソジジイ。

真祖の吸血鬼の力もらっても他になんかないと戦えねえだろうが。あんなとんでも世界にとばされて戦わない…つうことは、絶対にありえんからな。

「ほかの力だよ、ほかの力」

「えっと……………うん……………それじゃあ……………魔力と気をほどほどに与えよう」

ほどほどにか。まあ、原作に介入しなきゃバグキャラどもと戦うわけじゃないし、ある程度自分の身を守ればいいからな。

「じゃあそれでいいからなんか武器をくれ」

なんか厚かましいけど殺されたんだからこれくらいしてもらわなきゃな。

「つーか魔力も氣もほどほどじゃあ、戦えないだろ。使い方もさっぱり分からないしな。」

「武器か……。ならこれをやろう」

そう言っつて自称神様が俺に渡してきたのはなんとも馬鹿でかい両刃の剣だった。

おい、俺、剣なんか使えないんだけど。

「大丈夫じゃ。修行のために原作の200年前にとばすからの」「は？」

いきなり二百年前に飛ばすとか言っつてきたけど、まさかそこで鍛えろっつてじゃねえだろうな？

ふざけんなよ、テメエ勝手に俺を殺したんだからチートパワー寄越せよ。

「では行くかの」

「おい、ちよつ、待て!!」

と、俺が言っつてるんだが俺の下に穴が出てきた。

「行っつてくるのじゃ!!」

「人の話をきけ」

「っ!!」

俺の叫びも虚しく俺はこの穴に落ちていつてしまった。

拝啓 お母様

今更ですが先を旅立つことをお許してください。

息子の龍崎桜牙より。

EP0『プロローグ』(後書き)

感想待ってます！

Ep1 『炎、転生する』（前書き）

この度、この小説をリメイクすることになりました。

さらに話の大筋も変更することになりました。

改訂版の第一話となります。

では、どうぞー！

Ep1 『炎、転生する』

目に入る太陽の光、その独特の温かさをその身に受けた俺は目を覚ました。

体を起こして周りを見渡すと、そこは断崖絶壁、樹に囲まれた森の中に俺は寝ていた。

あと少しでも落ちるところがずれていたら、という恐怖を覚えながら、俺は起き上がる。

拳を開いたり閉じたりして、体の調子を確かめたところ、転生させてもらう前と変わりなく動かすことが出来た。

……いや。むしろ体が軽くなって、前よりも動きやすくなったかもしれない。

(体が『ハイデライト・ウォーカー真祖の吸血鬼』になった影響か……?)

原作じゃあ、ハイデライト・ウォーカー真祖の吸血鬼と人間の差を説明してなかったから、実際はよく分からないんだけど……。

まあ、見た目が少女のエヴァンジェリンがあそこまで動けるんだから、いくらか肉体の補正が成されてるんだと思うんだけどな。

ハイデライト・ウォーカーしかも真祖の吸血鬼は不老不死、つまりは肉体が成長しないってことは、やっぱりそうなんだらうなあ。

そんなことを思いながら、俺は周りを見渡す。すると俺はある物を発見した。

俺の身の丈ほどもある両刃の大剣。見るからに『炎』を冠するような姿に、俺は思わず息を呑む。

焼きつくされるといっつか、呑み込まれるような感覚に、俺は不安を覚える。

ハイデライト・ウォーカー体が真祖の吸血鬼になった影響だからだろうか？ この大剣の強

さが何となくだけど分かる。

(こんなスゲー剣貰ったって、今の俺に使えるわけねーじゃん)

肉体は最強でも、それを使ってる俺自身は最弱なんだから、宝の持ち腐れじゃんか。

余りの大剣の強さに内心で呆れながら、俺は柄に手を伸ばした。だがその瞬間。大剣から炎が発せられ、まるで俺に触られるのを拒むかのように反撃してきた。

ギリギリで手を引っ込めて横に転がって逃げたからいいけど、そうしなかったら俺は確実に焼かれていた。

放たれた炎は後ろにあった岩に直撃し、ドロドロに溶かしていたのを見ると、かなりの熱量だということが容易に理解できた。

(あ、危ねー……。危うく焼死するところだったじゃねえか……)

せつかく転生したつてのに、こんな下らねえことで死んじまったら洒落にならねえつつうの。

しかも不老不死で死ねないからあの炎で焼かれてる間、俺は気絶するしか痛みを遮断できないってことだ。

あの神様、なんつー代物を俺に寄越してんだよ。確かに武器を寄越せつて言ったのは俺だけどさ。

(ん？ なんだ、アレ……)

大剣の近くには一つのケースが置かれていた。

多分、あの大剣の近くに置いてあるってことは、神様が用意してくれたモノだつてことなんだろう。

俺は大剣に触れないようにしながら、そのケースを手にとり、中身を確認してみる。

中には一通の手紙と、一對のグローブが入っていた。
俺はケースの中から手紙だけを取り出し、中身を読む。

『お主がこの手紙を読んでいる頃、俺は亡き者となって……はいないから安心しておけ。』

さて、まずお主がいる場所はどの地図にも乗っていない魔獣の秘境じゃ。

そこにはかなりの数の魔獣がおり、修業にはもってこいの場所じゃ。

お主がある程度力をつけ、そこにある大剣「レーヴァテイン」の炎を使いこなせるようにならねば、周りに張つてある結界が破壊できぬから死ぬ気で修業するのじゃぞ?』

ツツコミどころがたくさんあるんだが、とりあえず言わせてもらおう。

独学で鍛えろって無理がありすぎるんじゃないのか?

どんなに強い奴だって教えてくれる奴がいるから強くなるわけで、一人で強くなれる奴なんてそれこそ才能がある奴だから出来ることだろうが。

ついでにレーヴァテインだけ? それを使いこなせるまでこの森から出れないって……。

しかも魔獣の森だと?

俺はアレを使えるようになるまで何回死にそうにならないといけないんだろうか……。

『次はグローブについてじゃ。』

そのグローブは「レクスグローブ」といい、「レーヴァテイン」の炎をつけている間のみ、拳にだけ操れるようになる代物じゃ。

しかもそれをつけている場合、「レーヴァテイン」の炎に精神を汚染され、凶暴的になるから気を付けるのじゃぞ?

そうせねばすぐに気絶してしまうからのう。

今のお主だと精々五分が関の山じゃろうが、鍛えれば制限なしで扱えるようになるじゃろう。

では、頑張るのじゃ。それではな』

神様の手紙を読み終えた俺は、ケースと一緒に入っていた『レクスグローブ』とやらを手に見してみる。

甲の部分には『L』と刻まれている。

甲に書かれているのはレクスグローブの『L』なのか。

しかもこのグローブ、レーヴァテインの炎を操れるようになるのか。

そんなことを思いながら、レクスグローブを手につける。

すると、装着したレクスグローブからかなりの量の炎が放出され、俺の意識が徐々に凶暴的になっていくのが分かった。

「オオオオオオツ!!!」

レクスグローブから放出された炎が拳に集束していき、その炎が集束した拳で近くにあった大木を殴り付けていた。

するとどうだろう。あれだけの太さの大木の殴られたところが一瞬にして焼失していた。

しかも迷惑なことに、このレクスグローブを装着してから体が勝手に動いて、自分の意思で止められないじゃねえか。

そして暴れだすこと約四分後、俺の意識は強制的にブラックアウトしていった。

そんな中、俺は思った。

こんなんでも生き残れるのだろうか、ってな。

Ep1 『炎、転生する』（後書き）

今回リメイクしたいと思ったのは、こちらのIDでの最初の作品を完結させたいと思ったからです。

投稿はあくまでも「狙撃手」がメインなので、更新は遅くなると思いますがよろしく願います！！

感想待ってます！！

Ep2 『炎、決意する』 (前書き)

早くもリメイク版二話投稿です。
では、どうぞー!!

Ep2 『炎、決意する』

レクスグローブを使って気絶してから約数時間後、目を覚ました俺は重大なことに気付いてしまった。

まず、『ハイテイル・ウオーカー真祖の吸血鬼』なので死ぬことは絶対に有り得ないが、腹が減るということには変わらない。

いざ飯を食おうといっても、食材も調理するものも全くなく、さらには周りには食べそうな木の実もキノコもあるわけでもない。

この森をくまなく散策すればどこかに食べそうなモノがあるだろうが、その場合には更なる問題が浮き上がってくる。

(魔獣と出会ったら……どうなるんですか?)

そう。魔獣と出会したらどうなるんだ、ということだ。

神様の言ってることが本当なのだとしたら、この森には魔獣がうじゃうじゃいることになる。

木の実やキノコを探してる間に見つからない、なんていう保証はないだろう。

見つかってしまえば最悪の場合、いきなり魔獣と戦う羽目になる……冗談じゃない。確かに生き残るために強くなりたいて思っ

たさ。

だけど、なんでこんな一方的にこんなことをさせられないといけないんだよ。

勝手に殺されて、不老不死の力と大層な大剣貰ってはいいが、戦いなんて知らないド素人がこんな場所に放り込まれて生き残れるはずないじゃんか……。

「くそつ、神様は……アంతそこまで俺が嫌いか……?」

俺は知らず知らずの内に握りしめていた拳を、近くにあった木に打ち付けていた。

これが夢であってほしいと思ったけど、拳を駆け抜ける痛みはまさに本物の痛みだ。

それに、怪我をしたのにその傷がすぐに再生していく。

そう言えば俺、人間やめたんだっけ。

改めて考えてみると、我ながらなんてバカなことをしたんだと思う。

別にチートな力を貰わなくても、『魔法先生ネギま！』の世界に転生することになったとしても、戦わない普通の日常を過ごせたんじゃないかと思う。

でもさ、仕方のないことだったんだ。

殺されたことには確かに抑えきれない怒りが内心であったことは確かだ。

だけど、それ以上に憧れたんだ。

マンガの世界の住人と触れあうこと。そして、主人公ヒロイになってみたいってことに。

誰しも一回くらいは、主人公ヒロイになってみたいってことを思うときがあるだろう。

それは、俺も例外じゃなかったってことだ。

(俺……本当にバカだ)

主人公ヒロイになれるチャンスに飛び付いて、チャンスをもノにしたはいいけど、戦いを前にしたら腰が抜ける。

しっかり考えたら分かったはずだ。

自分が主人公ヒロイなんかになれるはずがなかったってことくらい。

殴り付けた木を背凭れにするように、俺は尻餅をつく。

空腹感なんてどうでもいい。今はただ、この虚無感をどうにかし

しているのが見えた。

その余波で吹き飛ばされそうになるが、本能的にそれはダメだと悟り、何とか踏み止まる。

逃げる。いったいどれだけの間逃げ続けなければならぬのかは分からない。

だけど、死にたくない以上は逃げるしかないんだ。

不意に世界が回り始めた。いや、元々回ってるけどそうじゃない。視界で捉えられないくらい速く回ってるんだ。

(違う……。俺が回ってる……！？)

自分でもこんな冷静に考えられたことに驚いてる。世界が速く回らない以上、こうとしか考えられない。

そして何故自分が回っているかを考える前に、今まで経験したことのない激痛が俺の体を襲った。

最早叫び声を挙げることもすらも出来ない。

いったい、いつやられたのかは分からない。けど、確かに俺は鷹竜の鎌鼬プレスに巻き込まれたんだ。

目線の先には俺の左腕が転がっている。さっきので千切られたに違いない。

余りの痛みに痛覚が麻痺してしまったのか、さっきの激痛はもう感じない。

血が抜けて大分冷静になったのか、それとも開き直ったのかは定かじゃない。

しかしそれでも。まだ冷静に生き残るために逃げる事が出来る。

(ここで使えなくて、いつ使うんだ……！)

片方のレクスグローブを填めて、右手にレーヴァティンの炎を灯す。

一瞬でいい、一瞬だけでいいんだ。

この炎で、鷹竜の意識を俺以外の標的から外すことが出来さえすればいいんだ。

妙に冷静だななどと自己分析しながら、右手に宿った炎を鷹竜の真上に向かって、『投げるイメージ』で放つ。

鷹竜には人間並みの知性がなかったのか、動く対象を無意識に目で追っていた。

これだけでいい。あとはなるようになる。

俺は近くの崖から身を投げる。もちろん、下に川があることは確認済みだ。

そこで、俺は意識を失った。

「ん……」

頬に何か当たり、俺は目を覚ました。

既に夜空は真っ暗で、俺が気絶する前は昼だったことを考えると、少なくとも五時間以上は気絶していたことになる。

落ちた先が川で、水が緩衝材代わりになったから何とか死なずに済んでいる。

……まあ、不老不死だから死ねないんだけどな。

なんで沖に打ち上げられていたかは分からないけど、起きたら魔獣の腹の中だったなんてことにならなくて良かった。

さっきの鷹竜の鎌鼬プレスに切り飛ばされた左腕も生えてきてるし、何の違和感もない。

唯一、こっちに来るときに来たままだった制服の左肩からがなくなってるけど、それだけで済んで良かった。

(……少し動くだけで一々こうなってたんじゃ、命がいくつあって

も足りない)

しかも強くなってレヴァティンを使いこなせるようになるまで、この森から出れないって手紙に書いてあったしな。

嘘かもしれないが、多分本当のことなんだろう。

結局。俺はもう強くなるしか生き延びる方法はないし、この森から出る術もない。

神様とやらの間違いで勝手に殺されて、その拳げ匂に強くなるまで死にそうなの毎日が続く。

恨んでも恨みきれねえ。恨んで強くなれるんだっいたら俺はいくらでも恨んでやる。

だけど、恨んだって強くなれるわけじゃねえんだ。

(強くなってやる……。強くなって、絶対生き延びる!!)

俺は改めて決意する。

生半可なことじゃダメだ。やるなら本気で、死ぬ気で特訓して強くなるしかないんだ。

だけど、一つだけ気になることがある。

(いったい誰が、俺を川から助けてくれたんだ?)

川にほとんど流れがないってことは、勝手に沖に打ち上げられるなんてことはない。

少なくとも誰かが俺を助けてくれたことになる。

……この森には、俺以外にも誰かがいるのか?

生温い風が、俺の頬を撫でた。

E p 2 『炎、決意する』（後書き）

無意味なフラグを立ててしまった……。

これで早くも新しいオリキャラ登場フラグが立ちましたね W W
次回から修業に入ります！！

まあ、修業といっても最初ですから地味になりますが W W
では、感想待ってます！！

EP3 『炎、修業する』（前書き）

リメイク版第三話！！

狙撃手の方のコーポ編の執筆が長すぎてこっちがかなり短い……。

まあ、そのうち長くなるでしょうww

では、どつぞー！！

Ep3 『炎、修業する』

あれから夜が明け、近くにあつた木の実やキノコを焼いて食つた朝食を済ませた俺は、さつそく特訓を始めることにした。

とはいえ、実際に何をすればいいか分からなかつた俺は、寝る間を惜しんで（魔獣が来るのが怖くて寝れなかつたのもあるが……）今までのことを思い返していた。

まず、俺はこの世界に来てから『レクスグローブ』と『レーヴァテイン』を手に入れた。

レクスグローブはレーヴァテインの炎を一時的に操れるようになる代物で、使えばたつたの五分で気絶してしまうという欠陥がある。しかも使っている間は『炎』の象徴というべきか、燃え盛るかの如く性格が狂暴的になるおまけ付きだ。

その五分が過ぎた後は筋肉痛で体がメチャクチャ痛いのを記しておこう。

筋肉痛になるということは、レクスグローブを使ったときの状態飯に『狂化』と呼ぶ に俺の体力がついていけてないってことだ。

つまり俺が今からやることは、技を使えるようにすることでも、炎を扱えるようにすることでもない。

「レクスグローブの『狂化』に体力を対応させること……」

そうしなければレクスグローブを使ったときにたつた五分で気絶して、戦うどころじゃなくなるからだ。

炎を扱えるようにするのは、レクスグローブの『狂化』に耐えきれないようにしてからの話だ。

最初にやることが決まった以上、早速行動に移すしかない。

物事に近道なんてのではないが、腕立てや走り込みで体力をつけても、常に死ぬ気で出来ていない以上、どこかで甘さが出てくる。それじゃ駄目なんだ。それじゃ……強くはなれない。

どうせ死なない肉体なら、本当だったら死ぬくらいの特訓をしないと意味がない。

正直にいえば怖いさ。それでも、毎日をビクビクしながら生きていくのなんか真っ平御免だ。

その考えの果てに行き着いたのがここだ。

「崖登り……。補助もなしで登るのなんか、余程のバカか命知らずぐらいだろうな……」

上を見上げれば、およそ一〇〇メートルぐらいの先に、ようやく崖の終わりが見える。

ここを息切れしないで登りきるだけの体力がつけば、まずレクスグローブの『狂化』に振り回されるなんてことはなくなるはずだ。確認なんてものはないんだけどな。

事前に持ってきていたレクスグローブを見つめる。

レクスグローブを装着して登れば、身体能力を向上させたまま無理な運動をやらせることが出来るため、体力の向上は早く出来るはずだ。

だが、それじゃあ五分が限界だ。五分が過ぎたら気絶して登った高さから真っ逆さまだ。

逆にレクスグローブをつけなかったら今ある体力のみで、登るためかなりの時間がかかる。

じっくりとしっかりとした体力付けが出来る。

「……どっちを選ぶかなんて、決まってるじゃん」

レクスグローブを使えるようになるために体力をつけるんだから、

レクスグローブをつけたままやった方がいいに決まってる。

二回の深呼吸の後、俺はレクスグローブを両手に装着する。

レーヴァテインの炎がレクスグローブに宿り、性格が狂暴的になっていくのが分かる。

何故レーヴァテインの炎を扱えるようにする、このレクスグローブを使うとこのように狂暴的になるのか……。

詳しいことは分からないが、おそらくはレーヴァテインの炎を扱えていなく、レクスグローブに籠められた少量の炎が体内で暴れているためなんだろう。

「ウオオオオオオツツツ!!!!!!」

普段の俺なら言わなそうな雄叫びをあげながら、俺は崖を登り上がっていく。

崖を登るのも『狂化』しているとはいえかなり辛い。

身体能力が上がっているとはいえ、あくまでも現在の俺の身体能力より上がっているだけだ。

そんなに目にも止まらない速さで登ることなんて出来ない。

一点に留まらず、すぐに他の点に移動しなくては落下してしまう。それを『狂化』していると本能的に悟る『直感』があるために、体が勝手に動いている。

どちらかといえば、レーヴァテインの炎に動かされているといった方が正しいかもしれない。

何てことを考えてるうちに五分が経過したんだろう。

レクスグローブの炎が消えて、意識が急激に薄れていくのが分かった。

『狂化』して登った高さはおよそ三十メートルほど。

だが、このまま頭から落下したら間違はなく肉塊だ。再生するか
らって、そんな理由で簡単に落下したくない。

(やべっ……本当に……死ぬ……)

薄れていく意識の中で、俺は何とかそれを阻止しようとか何かを掴もうとする。

しかし、周りには掴めそうなものは何もない。

ジェットコースターを降りるときとはまた違う浮遊感を感じながら、俺は必死にもがく。

仕方ねえな、これで貸し二だぜ？

完全に意識がなくなりそうになる直前、そんな女性特有の音が聞こえてきて、温かい何かに包まれる感覚を感じ、完全に意識を失った。

……誰の声だったんだ、あれは。

俺が目覚まして最初に思ったことはそれだった。

この森には俺の他にも人間がいるかもしれないというのは分かっていたが、わざわざ助けてくれるとは思わない。

体に疲れないところをみると落下はしてなかったようで、やっぱり助けてもらったとしか思えない。

でも、周りには誰の人影もない。

「……………」

しかもこれは何なんだ？

目の前には明らかに人の手で作られた焼き魚が用意されており、いかにも怪しい感じがする。

それでも空腹には逆らえずに、俺は焼き魚を手にとり、口に運ぶ。

「……美味しい」

普通に美味かった。

あれ？ 別に罾が仕掛けられてる様子もないし、普通の焼き魚なだけで……。

いったいどの誰が、俺みたいな馬の骨に食料を用意してくれたんだ？

よく分からないんだが、この焼き魚を用意してくれた人に感謝しよう。もちろん神様なんぞには絶対エに感謝しねえ。

用意されていた焼き魚を食し、立ち上がる。
ふと、視線を傾けるとあるモノが目に入った。

「なんでコレがここにあるんだ……？」

何故か神様に貰って大剣、レーヴァテインが木に立て掛けてあった。

おかしいな……。レーヴァテインはレクスグローブをつけてないと掴めないから、一番最初に落ちた場所に置きっぱなしのはずだったんだが……。

まさか勝手に動き出したのか？ 何てことがあるはずがないか。

じゃあこの焼き魚を用意してくれたヤツが持ってきてくれたとでもいうのか？

「有り得ない……。もしそうだとしたら、レーヴァテインに認められたってことか……？」

レーヴァテインが使えるんだったら、その人に是非とも特訓の師匠をしてもらいたい。

だけどその人はどこにもいないし、今は探している時間すらもな

い。

探してる暇があるんだったら、レクスグロープを填めてもう一回登るか。

次は助かるなんて保証はないが、それでもやらなといけないんだ。

レクスグロープを再び両手に装着し、崖を登ることにした。

「はア……あいつも懲りねエな」

オレは木を背凭れの代わりにしながら、レクスグロープをつけて崖を登るあいつを見守る。

あんな使い方じゃ、すぐに炎がガス欠起こすに決まってるじゃん。レクスグロープを使うのに自分の体力を対応させることに気付いたのは良かったが、あんな修業の仕方じゃいつになってもそいつは使えないぜ？

むしろ死にそうになりすぎて、死ぬ気で修業に取り組めなくなる。はあ……。今までで二回も助けたのに全然気づいてねえし、こりや結構早めにオレが出てく必要があるな。

「まア、もう少し自力で頑張りな。もう少ししたら助けてやるからよオ」

オレは今にも崖から落ちそうになっているヤツを見て呟き、もう一度ヤツを抱き抱えた。

やれやれ……。本当に懲りねエヤツだぜ。

Ep3 『炎、修業する』（後書き）

早くも予定になかったオリキャラの登場フラグがww

次回の更新は出来るだけ早くしたいと思います。

それと、出すオリキャラは前と違うかもしれません。

あのキャラが出て、あのキャラが出ないというのがありますがご了承ください。

また、せめて旧版のこのオリキャラだけは出してくださいというのがあったら言ってください。

では、感想待ってます！！

Ep4 『炎、師事する』 (前書き)

旧式にいなかった師匠オリキャラ登場!!
では、どうぞー!!

Ep4 『炎、師事する』

「はぁ……はぁ……。くそ、まだ足りないのか……」

俺が修業を始めてから、早くも一週間が経過しようとしていた。

一週間っていつても時計があるわけじゃないから正確な時間は分からないから、日が落ちて日が昇ったら一日が経過したことになっている。

この一週間、俺はレクスグローブを装着して崖を登り、意識を失わないようにすることと、基本的な体力をつけることだけに集中していた。

馴れてきたからか、体力がついてきたからかは分からないが、レクスグローブに宿る炎が消えても気絶しなくなった。

気絶しなくなったのはいいとして、炎が消えたら登った位置から真っ逆さまというかなり危険な状況に陥ってしまった。

昇りきるにしても上への距離はまだあるし、降りるにしても時間がかかる。たった今降りてきたところだけど、案の定かなりの時間がかかってしまった。

(やっぱり、体力も何も足りない……。畜生、こんなんじゃこっから出るのも無理だぞ……)

ここから出るには『レーヴァテイン』の炎を扱えるようになって、この魔獣の森に張られてる結界を破らないといけない。

『レーヴァテイン』は愚かレクスグローブすらも扱えるようになっていない以上、出れるのに何十年かかるのやら……。

この一週間の間はどうしてかは分からないが、魔獣と出くわさなかったけど、これから先も出逢わない保証はない。

せめてレクスグロープを扱えるようになり、魔獣と戦えるようにならないと絶対に生き残れない。

「どうすればいいんだ……」

このまま崖登りなんかやったとしても、体力がつく前に魔獣に見つかって食われちまう。

体力の他にもレーヴァティンを扱うんだったら、多分戦闘面に関しても修業をしないとイケないのかもしれない。

レクスグロープに宿る少量の炎すらも未だに扱えない。そうだったのに、レーヴァティン本体の炎を扱えるようになってなれるはずがないじゃないか。

なんで……なんでこんな目に遇わないといけないんだ。

神に勝手に殺されて、勝手に転生させられることになって、勝手に不老不死にされて、勝手にこんな危ない場所に送られた……。

俺が望んだ武器でさえ強くなければ扱えない代物だし、何もかもが神に勝手に決められたことだ。

どうして俺がこんな目に遇わないといけない。どうして俺はこんな場所に送られた。どうして俺を　殺したんだよ……。

「もう嫌だ……」

俺は両手を投げ出してその場に横たわった。

なんで前世は普通の学生で喧嘩をすることさえなかったのに、いきなりこんな非常識なモノと戦わないといけないんだ。

戦いなんてしたくない。どうにでもなっちまえばいいんだ。

レクスグロープを放り出して、俺は空を見上げる。

あーあ。なんでこの空だけは転生後も転生前も同じなのに、俺だけはこんなにも変わっちまったんだ。

主人公ヒーローなんてもうどうでもいいし、俺は生きればそれでいい。

どうせ食われたって生きれるし、再生し続ける。痛みを受け続けるのは、不老不死になったときに決まったことなんだ。

修業して強くなるか、何もしないでここにずっといるか。どちらにする、俺の選択肢はどちらの地獄を選ぶかなんだ。

もう、俺は嫌なんだ。修業するのも、戦うのも。

「甘ったれてんじゃないぞ、そんなことでいいと思ってるのか？」
「……誰だよ、アンタ」

今この場に誰かがいると分かったとしても、別に驚きやしない。誰がいたって、俺には関係ないんだ。

話し掛けてきたのは女性だった。オレンジ色の髪を腰の辺りまで伸ばし、右の頬には三角形の模様が描かれていた。

どことなく感じたことのある荒々しいというか、温かいというか。だけど、そんなことはもうどうでもいいんだ。

俺はもう、何もかもがどうでもいいから。

「腑抜けなお前に名乗る名前などない」

「あっそ……。どうか行ってくれよ。俺はもう、何もしたくないんだ」

「だから甘ったれてんなって言ってるんだ」

女性は体を放り出している俺の胸ぐらをつかんで無理矢理起き上がらせると、俺の目を直視しながら言ってきた。

何だっつてんだ、こいつは。甘ったれるも何も俺は、何もしたくないんだよ。戦うのも、修業するのも。

だいたい、俺が強くなる必要なんてどこにあるって言うんだ。くそっ、なんでこんな会ったばかりの女に甘ったれなんて言われ

ないといけないんだ。

平々凡々な世界から、こんな非常識な世界に連れてこられて甘ったれになるのも仕方ねえだろうが。

俺は胸ぐらを掴んでくる女性の手を掴み、叫ぶ。

「アンタに……アンタに何が分かるってんだ！！ 戦いなんて知らなかった俺が無理矢理ここに連れてこられて、死にそうな目に遇ってるんだ！！ 見ず知らずのアンタに、とやかく言われる筋合いはねえんだ！！」

「だから甘ったれるなど言っているんだ！！」

俺の叫びよりさらに大きな声で女が叫び返してきた。

空気が振動して、森が震えるのが素人の俺でも分かった。

女は俺が掴んだ手を振り払い、顔同士がくっつきそうな程に近付かせながら言ってきた。

「無理矢理連れてこられた？ ふざけるなよ、小僧。お前は自分から望んでここに来たんだだろうが」

「何を……言つて……」

「断ることなら出来ただろ。行き先も、与えられるものも分かって尚、お前はここを選んだ。分かるか？ ここに来たのはお前の意思だ。それを勝手だと？ 無理矢理だと？ 甘ったれるな！！」

……言われてみれば確かにそうだった。

殺されたのも、不老不死にされたのも間違いなく神の勝手だった。転生してもらうとも言われた。

だけど、確かに断ることも出来たんだ。

転生したくない、もう死んでもよかつたんだって言えば俺はここに来る必要はなかつたんだ。

そうしなかつたのは、まさしく俺の意思。

俺が自分の意思で転生することを望んでいたから、あの転生するときに俺は他の力を求めたんだ。

もらった力は修業しなければ使えないものだった。だけど、俺は確かに転生することを、見ず知らずのうちに望んでいたんだ。

だから俺は、ここにいます。

それを神のせいにしちまうのは責任の転嫁だ。

言われて初めて気付いた。

俺は主人公ヒーローになれなくたっていいんだ。

俺はただ、ここにいますだけがいい。

「……ありがとう」

「分かればいいんだ、分かれば」

女性は満足げに微笑んで頷くと、俺から手を話して一歩だけ離れた。

よし、もう悩む必要なんてない。ここにいるのは俺が望んだことだ。だったら、やれるとこまでやってやる。

……と。頭が冷えて改めてやることにしたのはいいが、この女性はいったい誰なんだ？

しかもなんか俺の転生したことについても知ってそうだし、どうなってやがるんだ。

「で、アンタは誰なんだ？ その……俺の事情について知ってるみたいだけど」

「なんだ、オレのことが分からないのか？ 薄情な奴だな。こっちに来てからずっと一緒にいたのにな」

「ずっと一緒にいた……？ それってどういう意味だ？」

「まだ分からないか。オレはレーヴァテインだ」

「は？ ええ

ッ！？」

俺の間抜けな叫びが、魔獣の森に木霊するのだった。

「…………マジか？」

「本当だ。嘘をついてどうするっていうんだ」

「いや、だってさ…………」

「信じられないのも仕方がないがな」

俺は目の前にいる女性から、信じ難い話を聞いた。

女性はどうかやら本当に神から貰った大剣、レーヴァテインということらしい。

神に人間になれる機能をつけてもらったとか言ってる、俺の面倒を見るように言われたらしい。

最初のうちに俺が気絶して崖から落ちたとき、助けてくれてたのはどうかやらこいつだったらしい。

この一週間に顔を出さなかった理由はどこまで一人で修業して、どこまで心を折らずにいられるかを見たかったためらしい。

しかもこいつの予想よりも大分早く心が折れちゃったから、がっかりしたなんて言われた。

…………一週間保っただけでも良しとしてくれよ。

「甘えるな。オレが修業をつけてやるからには、そんな甘い考えはさせないからな」

「修業…………？ アンタがつけてくれるのか？」

「当たり前だ。何のためにオレが来たと思ってるんだ？ 今日からみっちりオレの使い方、教えてやるからな」

そう言いながら俺を見下してくる女性。

こ、怖い…………。眼光が果てしなく怖い。

人間じゃないけど、同じ人型でこんな眼光出来るもんなんだな。

「俺は龍崎桜牙……ってそれは知ってるか。で、俺はアンタのことはなんて呼べばいいんだ？」

「ヴァンだ。ヴァン・レーティ」

「ヴァン・レーティ……」

それってレーヴァテインの文字列を変えただけだよな？

なんて安直な名前なんだ……。別に文句があるわけじゃないからどうでもいいけど。

俺がそんなことを考えていると、何故かヴァンに思いつきり頭を殴られた。

「な、何すんだ!!」

「変なことを考えたな？ いいか、修業中に他のことを考えてみる。オレは容赦なくお前を殴り飛ばすからな」

覚悟しておけ、とヴァンは付け足したあと再び睨み付けてくる。

や、やっぱりこいつ、めっちゃめっちゃ怖い……。

俺は師事する人が出来たはいいものの、強くなるまで何回殴り飛ばされないといけないのかを考えながら、憂鬱になるのだった。

Ep4 『炎、師事する』（後書き）

次回から本格的な修業に入ります。

Ep10まで終わらせられたら幸いです……。

報告になりますが、旧式とはかなり違う話になると思います。

オリジナルの話を結構盛り込んで、大戦期は介入しないで傍観の恐れがあります。

あとはミレアとセルキは出ない可能性大で、他のオリキャラを出したいと思ってます。

例えば主人公を慕う氷爆野郎とか、熱血漢の雷速野郎とか、唯我独尊の紫雲野郎とか、内気の疾風弓姫とか……です。

今のところ予定するのはこのくらいですが、とりあえず『氷』『雷』『雲』『風』のオリキャラと『炎』の主人公で話を進めます。

他に属性で出してほしいのがありましたらオリキャラのアイデアを（殴

え、えー……。とりあえずEp10までは主人公とヴァンで進めるつもりです……。

では、感想待ってます！！

EP5 『炎、講義を受ける』 (前書き)

こっちの筆が進むWW

では、どうぞー!!

Ep5 『炎、講義を受ける』

「とりあえず、お前にはオレの炎について説明してやる」

「ヴァンの炎？ ああ。レクスグローブに宿る炎のことか」

「そうだ。お前が無駄にオレの炎を消費するもんだから、垂れ流しにしてたらこっちが参っちまう」

「垂れ流しって……。使い方知らないんだから仕方ない」

「口答えするなー！」

口答えしたわけじゃないのに、問答無用でヴァンに殴り飛ばされた。

怖いというよりも、ヴァンのやることはめっちゃめっちゃな気がする。会ってからまだ一時間も経ってないのに、ヴァンの性格を何となく理解できたかもしれん。

バリバリの体育会系の性格だな。

「お前のレクスグローブに宿る炎ってのは、オレの使う三種類の炎の一つに過ぎない」

「三種類の炎……。そんなに炎があるのか？」

「そうだ。伊達に宝具に認定されたわけじゃないからな」

なるほど……。レーヴァテインって確か伝説の武器として歴史に残ってたんだっただな。

何でも世界を焼き付くした破滅の杖だとか、そんな歴史だったと思う。

……。今さらだけど、ヴァンって怒らせたりしたら危ないんじゃないかねえか？

世界を焼き付くされたら困るぞ。

「使っつていうよりもオレの感情の炎に近いな。お前のレクスグロ
ーブが引き出してる炎は『憤怒の炎』、つまり怒りの感情の炎だ」

ヴァンの説明によると、『レーヴァテイン』には感情による三種
類の炎が存在しているらしい。

基本的にレーヴァテインが引き出している炎というのは混合炎、
純度の低い炎ということだ。

そして、レクスグローブが引き出しているのは『憤怒の炎』。

怒りの感情が発生させた炎を拳に宿すということは、怒りの感情
を自分の中に取り入れるということ。

だから性格や口調が狂暴的になり、攻撃的になるみたいだな。

「他にも二種類あるが、今のお前に教えても意味がないからな。と
りあえず『憤怒の炎』を使えるようにならないとな」

「でもその『憤怒の炎』ってヴァンの怒りの感情を炎にして、レク
スグローブに籠めてるんだろ？」

「そうだな。オレの怒りが強ければ強いほど、炎の強さは強くなる
」ってことは、俺がこれを使ってるときはいつも怒ってるのか？」

「そうじゃない。オレの感情の炎というのはストックが出来るんだ。
だからお前が使った分だけ消費されている」

「なるほど……。いつも怒ってるわけじゃないんだな」

「当たり前だ。オレがいつも怒っているように見えるのか？」

ええ、見えますよ……。なんてこと、本人がいる前で正直に言える
わけねえだろうが。

ただでさえ口答えらしきことをやったら殴り飛ばされるのに、機
嫌を損ねるようなことしたら焼き飛ばされるかもしれない。

とりあえず俺が使ってた『憤怒の炎』は、今までヴァンが怒って、
溜め込んできた炎ってことになる。

出力は大したことないものの、あれだけ炎を使ったのになくならないところを見ると、相当怒ってたんだな。

「『憤怒の炎』は攻撃的になる代わりに冷静さが欠けて、反撃を受けやすい炎だ。あまりオススメは出来ないな」

「じゃあレクスグローブを使うときは他の炎を使えばいいんじゃないの？」

「無理だ。レクスグローブは『憤怒の炎』しか宿せないようになっている。第一に、今のお前じゃ他の炎は扱いきれん」

なんだそれ。『憤怒の炎』しか使えないようになってるってことは、あんな感じになるしかないってことじゃなか。

何だかあんまり使えないグローブだな。

なんてことを考えていると、ただ、とヴァンが言葉を続けてきた。

「オレから炎を供給される以外にも、『憤怒の炎』以外の炎を扱えるようにする方法はある」

「他の方法か……」

「そうだ。まずオレから供給された炎ってというのは、あくまでもオレの炎でありお前の炎じゃないんだ」

「つまり……どういうことでしょうか？」

「お前がオレの『憤怒の炎』を扱えなくても仕方がないってことだ」

ヴァンの説明によると元々レクスグローブの構造自体が甘く作られていて、『憤怒の炎』ではなく、レーヴァティンが発する普通の炎しか扱えなくなっている。

『憤怒の炎』というのは変化した特殊な炎のため、構造が甘いレクスグローブがそれを操るには本人の技術も必要となる……らしい。もしかして、供給される炎が『憤怒の炎』じゃなかったら、レクスグローブで炎が扱えたんじゃないのか？

「時間をかけて修業をすればオレの『憤怒の炎』を使えるようになるだろうが、そんなことをするよりも他にも方法がある」

「それが、アンタに供給された『憤怒の炎』以外を使う方法か？」

「そうだ。オレの炎を自分の炎にするために、供給された炎を清める必要があるんだ」

「……遂に話についていけなくなったぞ？」

「まあ、無理もない。ここまでついてきただけ寧ろ関心に値する」

なんかヴァンに素直に誉められると、照れるな。

さつきは殴り飛ばされたってのにな。

「炎には大きく分けて二つの炎がある。分かるか？」

「……自分の炎と、他人の炎？」

「正解だ、簡単だな。自分の炎を制御するのは簡単だが、他人の炎を制御するのは難しいのは当たり前だろ？」

「そうだな……。実際にスゲー難しいし」

「だから扱いやすいように、他人の炎を自分の炎へと清める。つまりは変換するってことだ」

変換、か。確かに他人の炎を自分のものにしてしまえば扱いやすくはなる。

他人のよりも自分の方がいいからな。

「だけど、変換するっていつでも簡単なことじゃないと思うし、第一にやり方が分からないんだぞ？」

「他人の炎を自分の炎へと清めるには、大空のように全てを受け入れる包容力と、精神力が必要となる」

「そういうけど、確実に俺にはどっちもないぜ？」

「だから修業するんだ。包容力と精神力、この二つを鍛えて他の炎

を扱えるようにした方が『憤怒の炎』を扱えるようにする方が早い
「な、なるほど……」

供給される『憤怒の炎』を扱えるようにするには何をすればいいかは分からないけど、精神力と包容力を鍛えるよりも難しいのは話の内容から理解できる。

ただでさえ難しい修業をしないとイケないのに、やった結果が『憤怒の炎』一つじゃ意味がない。

オススメしない『憤怒の炎』を扱えるようにするよりも、他の種類の炎を扱えるようにした方が絶対にいいに決まってる。

「そうそう。言い忘れたが清めたあとに使えるようになる炎は、その者の周波によって違うんだ」

「どういうことだ？」

「オレは『感情』によって使える炎が決まるが、必ずしも『感情』に作用した炎ってわけじゃないんだ」

「つまり、俺の場合は属性が固定された炎だったり、環境によって変わったりするってことか？」

「ああ、そういうことだ」

炎って、色々な事情があるんだな。

『感情』や『環境』によって扱える炎が変わったり、清めたりすると色々難しくいんだな。

俺はどんな条件で扱える炎が決まるかは分からないけど、多分、ヴァンが『感情』で扱える炎が決まったように、俺も自分にあったものなんだろ。

「ここまで説明したはいいが、お前がここに至るのはまだまだ先だ」
「そうでした……」

色々と説明してもらったはいいけど、今の俺は自分の炎を扱えるようになるどころか、炎を清めることすらも出来てはいない。

先だってやることは基礎体力をつけることと、『憤怒の炎』を清めるようにすることかな。

やり方はさっぱり分からないが、その辺りはヴァンが何とかしてくれるはずだ。

「清める、即ち変換する方法っていうのを説明するが、ついてきてるか？」

「今は何とか。どうせついてこないと殴り飛ばす気だろ？」

「当然だ。まずそれはいい……。清めるって言っても、まずは『憤怒の炎』を体内へと吸収する必要がある。両手ではなく、体内にだ」

レクスグローブに炎が宿っていてもそれはあくまでも両手にであり、体内にまで行き渡ってるわけじゃない。

両手にだけ宿る『憤怒の炎』であんなになるのに、体内になんか宿したらどうなるか分かったもんじゃない。

しかも俺が『憤怒の炎』が一時的に扱えてるのはレクスグローブを装着してる場所と時間だけで、それ以外の場所じゃ一時的にできえも扱えない。

一つの作業をするにしても、さらに一つの課題が出てくる……。これじゃキリがないな。

「お前が思っているとおり、まず体内に炎を吸収した場合、間違いないで炎がお前に牙を向く」

「じゃあどうすればいいんだ？ レクスグローブに宿る炎はアンタのだ。外部からのコントロールとかは出来ないのか？」

「無理だ。いかにオレの炎とはいえ、レクスグローブに宿ったんならオレの制御からは切り離されている」

「だったらどうしたらいいんだ？」

「だからまずは精神力を鍛える。体内に炎を吸収する修業はそれからだ」

精神力を鍛えることは結果的には炎を扱えるようにするのに繋がるけど、仮定的には炎は必要としない。

レクスグローブの『憤怒の炎』を体内に吸収した場合、それを自分の炎にするために清めないといけない。

何をするかはさっぱりだけど、こっちからやった方が確かに正しいのかもしれない。

だけど、自分の炎っていったい何なんだろうな。ヴァンは『感情』による『憤怒の炎』と、あその他の二種類の炎だからな。

体内に吸収した『憤怒の炎』を清めて普通の炎に戻して、そこから自分の炎とする。

蠟燭を灯すような作業だ。

自分が本来持ち得ている力を、他人の力で発現させる。

難しいな、炎って。だけど、面白い。

前世では考えもつかなかった新しい考えが、次々と入り込んでくる。

「早速だが精神修業に入るぞ」

「お、おう！！」

ヴァンが動き出したので、俺も急いでヴァンの後を追っていく。

どんな修業かは分からないものの、恐怖と楽しみが合わさった奇妙な感覚を抱いていた。

「ってさすがにこれはねえだろうが」

「ツツツ！！！！」

「甘ったれるな。これぐらいやらねば修業にならんだろ」

寧ろこれでも足りないくらいだ、とヴァンはため息をつきながら言うてくる。

いや、だって仕方ないだろうが。前世じゃ、こんなことをする羽目になるなんて思わないしよ。

なんで……なんで 滝に打たれなきゃならねんだよ!？
滝に打たれて精神修業だなんて、どこの熱血だよ。これを本当にやってる奴なんて聞いたことないっての。

まあ、実際に修業したことがある奴を見たことがないから、一概には言えないけどさ。

ってそうじゃない!! 寒すぎるぞ!？
こんなんじや精神修業の前に風邪ひいちまうわ!!

「かの偉人、椎 深夏は言っていた。『精神修業をするなら滝に打たれるのが一番だぜえ!』」とな

「言わねえよ!？ つーか椎名深 はそんなこと言わねえし偉人でもねえわ!！」

「ならば、かの偉人、杉 鍵は言っていた。『ハーレム作るなら全員を幸せにしてみせろ』」とな

「確かに杉崎 なら言いそうだけど修業に関係ねえだろ!？」

なんでヴァンは表情を全く変えないまま『生徒会 一存』ネタで攻めてくるんだよ。

あれか？ 生徒会 一存が好きなのか？
だったらせめてこんな時じゃなくて、修業してないときにしてくれれば良いだろうが。

修業してるときに言われてもツッコミが大変なんだよ。つーか本当にこれ修業なのかよ、怪しいな、おい。

滝の勢いは強いわ妙に冷たいわで、こんなので精神力なんか鍛え

られるのかよ……。

「ふざけるのはここまでにして。滝に打たれるのは確かに意味がある」

「な、なんだよ、いきなり……。寒いから手短にお願ひします！」
「この寒さと痛みを感じない程度まで精神を集中させることが出来たならば、精神修業の第一段階は終了だ。何日かかるか分からんがな」

ま、まさか精神修業ですらも第一段階とか第二段階とか言う分け方だと！？

辛いのは分かってたとはいえ、これは辛すぎるんじゃないかな……。

俺は滝に打たれる冷たさと痛みで気絶すら出来ないまま、俺は滝に打たれ続けるのだった。

EP5 『炎、講義を受ける』（後書き）

EP10まで修業が終わるか心配になってきました……。
もしかしたらもっと長くなるかもしれない。
では、感想待ってます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7176n/>

『炎』を冠する吸血鬼

2011年10月12日10時07分発行